

《教育長メッセージ 第52号》

『冬の遊び』

平成28年、今年最後のメッセージは、私の子どもの頃の冬の遊びについて話してみたいと思います。

秋になると、母は、毛糸屋さんで毛糸を選んできて、その年の冬用のセーターを知り合いに頼んで編んでもらっていました。

少年伊藤文康は、ほとんど毎日、そのお気に入りのセーターを着て冬を過ごしていました。北上山地の南の端しっこの野山を駆け巡っていました。



○クリスマスツリー

南三陸志津川の海の近くで育ち、我は海の子ですが、リアス式海岸で山が海にせまり、野山も私の遊びのフィールドでした。秋、栗採りやあけび採りをしながら、背丈が2mほどの三角にきれいに枝の張ったもみの木を探して、今年のクリスマスツリーはどれにするか目星をつけます。

そして、12月に入ると山に入って、もみの木を伐り出します。

ノコギリで根元から伐るのです。今思えば、これから数十年かけて大きくなるもみの木をと思うのですが、その頃は考えが及びませんでした。

伐り出したもみの木の幹を縄で縛って、家までの山道をもみの木を引っ張って駆けくだります。これがけっこう面白いのです。ザザザザー、山道がもみの木で掃除されてきれいになります。山道を過ぎて道が平らになると、やったあ感で意気揚々と家まで進みました。

そして、バケツに生けてクリスマス飾りを飾るのです。振り返ると贅沢なクリスマスツリーだったと。

○ソリ作り

冬前に、その冬用のソリを作ります。11月に雑木林の斜面に入って、直径10cmぐらいの根元が曲がった木を根元から伐りだします。ソリ用の木は、何年も前から目星をつけておいて、太くなるのを待ちます。

種類としては、アオキがやわらかく滑りがよく、山桜は、固くて、その分滑るほどにつるつるになるので人気でした。時に目星をつけておいても友だちに先に伐り出されることもあり、常に、山に入り確認をしていました。

小学生が自分の両手でようやく回るような木を、バリバリバリと切り倒すのです。目を閉じると、今でも、生きている木がゆっくりと倒れる光景がよみがえってきます。

木は、根元の部分から1 mぐらいで切って、それを担いで山を下り、製材所に持って行って縦に半分に切ってもらいます。製材所のおじさんは、恒例のことなので「今年の木はいいなあ。」などと批評してくれました。

そして、製材所で拾った板を使って紐をつける横木と座る場所を釘で打ち付けて完成です。

そのソリを背中に背負って、颯爽と山に向かいます。

今思えば、すごい体験をしたんだなあ。私は、あらためて、育んでくれた故郷を愛おしく思うのです。

ひと冬を過ごすと、少年伊藤文康のお気に入りのセーターは、袖口がほつれ、ところどころに穴があいて、その度に母が繕った跡が残っていました。

震災後、仮設住宅に行くと母が記憶の中にあるお気に入りの色のセーターを着ていました。毎年、作ってくれましたが、母は、それを自分のものとして繕いながら大事に着ていたようで、「3. 11」の日も偶然それを着ていたようです。

私の冬の記憶は、毎年、母が用意してくれたあったかいセーターです。

今回は、「新年あけましておめでとうございます」として、新年のあいさつをいたします。